

カローア ハッピーライフ！2  
サンプル

最後、見送りにまで出てくれた医師は「一緒に頑張りましょうね」と力強い言葉をくれた。篠崎は振動が少ないようにと丁寧な運転をしてくれたし、エアコンの向きまで調整をしてくれた。

(すごい……大切にされてる……)

いや、大切にされてもいるけれどどちらかと言うとすごく気を遣われているような感じだ。

「さあ横になろう。あ、下着を替えておこうな」

今日の下着は黒色だった。これでは万が一出血しても気付けないからだろう。ベッドに横になっていると、篠崎がパジャマに着替えさせるときに下着も淡いグレーのものに替えてくれた。

「白の方がいいな。購入しておくよ」

「すみません」

「いいんだ。それより疲れただろう。少し寝ようか」

「は？」

強がる気にもなれなかった。もう目を閉じていたい。身体がいつも以上にベッドに沈んでいるような気さえている。多分射精がかなりきつかったのだ。それに精神的にもだいたい。

ああ、でももう少し篠崎と話していたい——というより、話さなければならぬことが多過ぎる。

「しのぎぎ……」

「ん？」

篠崎もラフな格好に着替えるとベッドに横になってくれた。そしていつものように肩までしっかりと布団を掛けてくれる。

「今日、ありがとうございます」

「いや……それよりも大丈夫か」

「怠いですけど……大丈夫です」

普段なら抱きしめてくれているのに、今日はなぜかそれが無い。寂しい。篠崎の体温と匂いに包まれていたいの。

「諒」

「は？」

真剣な話だ、ともう分かる。一体何を言われるのかと思うと怖くてたまらない。勝手に妊娠なんてして、と罵られたらどうしよう。家事ができないならいらぬと言われてしまったら——そんなことを言う人ではないと分かっているはずなのにそう思ってしまう。情緒が不安定になっているのだろうか。

「本当にいいのか」

「え？」

どんなに聞きたくない、と思っても止めない限りは口にされてしまう。

止めればよかった、またにしてくださいと言えはよかった。けれど篠崎は普段安西の言葉をそのように

流したりはしない。忙しくても手を止めて安西を優先してくれる篠崎にそんなことはできなかった。

「これから悪阻も、出産の痛みもある」

「はい……」

「もちろん俺ができることは全てするが、男が出産というだけで……」

その言葉の先は言われずとも分かった。外に出れば奇異な目で見られるだろう。ヒソヒソされるかもしれない。もしかしたらもう今後はこの家に住み続けることも難しくなるかもしれない。役所だって何を言われるか分からない。そもそも出生届けはどうなるのだろうか。分からないことではいいだ。篠崎が気にしてくれている内容もよく分かる。

「篠崎、僕、不安です。不安でいっぱい、今は正直喜びよりも戸惑いと不安しかありません」

純粹に喜んであげられなくてごめん、とお腹の中の存在に詫びる。けれどそれが今の正直な気持ちだった。本当なら喜ぶべきなのに。喜んでほしいと子供だって思っているはずなのに。

「ああ……」

篠崎も同じなのだろうか。これから安西のお腹が大きくなって、いかにも妊婦という身体つきになった安西と出掛ければ、当然篠崎もそういう目で見られることになる。篠崎は耐えられるのだろうか。逃げたくなってしまわないだろうか。それとも安西を外に出さず、買い出しは篠崎一人で行うようになるのだろうか。存在自体を隠されてしまうのだろうか。もしかしたら生まれてきた子供まで、なかったことにされてしまう可能性すら——いや——。

(ダメ、そんな風に思っちゃ……だって篠崎はそんな人じゃない……)

やはり今は感情がおかしい。きつと妊娠して心のバランスが狂っているのだ。それだけだ、きつと。

(篠崎はそんな人じゃない……大丈夫……大丈夫)

「……篠崎は一緒にいてくれますか？」

「もちろん離さないよ」

伸びてきた腕。力強い抱擁。それは表情を隠すためのハグではなかった。安心を与えるためのものだった。

「なら大丈夫です」

篠崎が一緒なら耐えられる。大丈夫。きつと篠崎は見捨てたりしない。途中で放り出したりなんてしない。

「ゆっくりでいい。不安は全部吐き出してくれ」

「篠崎……」

不安さえも抱きしめてくれる。抱えてくれる。拾い上げてくれる。一緒に背負おうとしてくれる。

「……僕、毎日泣くかも」

「じゃあずつと抱きしめていよう」

「毎日ぐずるかも」

返ってくる力強い声が嬉しくて、つい言葉が続けてしまう。

「何度でもキスをしよう」

「仕事の邪魔をするかも」

「何をされても諒にされるなら邪魔にならないな」

「パソコンの前に座っても？」

「それは俺の膝に座ってくれるということだろうか？」

「もう……ふふ……」

あまりにもプラス思考な返答に、思わず笑ってしまった。けれどその自信に満ちた返事が嬉しくて、涙が落ちる。

「もう……篠崎ってば……」

これは不安や悲しみの涙じゃない。嬉し涙だ。篠崎に愛されて、大切にされて、守られて、嬉しくて泣いているのだ。恥じる涙じゃない。

笑いながら泣いていると、篠崎が少しだけ身体を引いた。そして顎を掴まれ顔を上げさせられてしまう。

「……やだ」

それでも笑ってしまう。きつとこんな涙でぐしゃぐしゃの顔でも篠崎は引いたりしないんだろうな、また子供扱いしてくれるのかな、と。

けれどそれは少しだけ篠崎の思いとは違っていた。

「綺麗だ」

「え？」

「綺麗だ……すごく綺麗だ」

「や……」

真摯な目に見つめられ、恥ずかしくて顔を背ける。けれど顎に添えられたままの手はそれを許してはくれなかった。

「ずっと可愛かったのにな……もう親の顔なのかな」

「や、そんな……」

せめて、と思い目を閉じる。けれどそれではまるでキスを待っているときのようで、悩んだ末に目を開けた。

「生まれる前までは俺だけの諒でいてくれ」

「あ……」

（そっか、子供ができたなら……二人だけの時間がなくなる？）

「……どうしたかな」

一瞬で爆発した不安感に気付かない男ではない。細められた目。顎に添えられていた手は頭に移動し髪を梳く。

（こんな気持ち、普通じゃない……子供が邪魔なんて、篠崎を子供に取られちゃうなんて——）

もしかして母親も同じ気持ちだったのだろうか。それで邪魔になって安西を捨てたのだろうか。いらなくって。

（もしかして、僕もこの子を——）

「諒……無理しなくていい」

「え？」

「俺が一番大切なのは諒だ」

「篠崎……」

「俺には諒がいてくれればそれでいいんだ」

何と答えたらいいか分からなかった。だって、それではまるで母親と同じなのだ。

「や……」

「諒？」

「や、やです。嫌！」

篠崎の胸を突き飛ばす。今は一緒にいたくない。触れないでほしい。

「諒っ？」

「嫌です！」

何が嫌、とか、どうして嫌とか、きちんと言えればよかったのだろう。けれどそこまで頭が回らなかった。だって嫌だった。認めたくなかった。考えたくなかった。

(大好きな篠崎と母親が同じ考えなんて……!)

篠崎は動かなかった。動こうと——ベッドから——寝室から出て行こうとしてくれない。それなら自分が出て行くしか——そう思って強引に起き上がるとそこでようやく篠崎が動いた。

「すまない……俺が出て行くから、諒はこのまま横になっていなさい」

(っ……)

出て行く、という言葉に身体が冷える。怖い。勝手に身体が震えた。自分でもそう考えていたはずなのに、なのに篠崎の口からそれを聞くと怖くてたまらない。

(捨てられるっ!)

「や！ いやああああ！」

「諒!!!!」

肩を掴まれるけれど、怖くて怖くてどうしたらいいか分からない。篠崎に捨てられてしまう。篠崎にまで捨てられてしまう。

「やだあああああ！」

「諒！ 悪かった、大丈夫、ここにいる！」

「やあああ！」

篠崎を押し退けたのは自分なのに。自分から離れようとしたのに、篠崎が出て行くと言ったら恐怖に震える。なんて自分勝手なのだろう。でも心より先に身体が反応してしまった。

「やあああ！」

「諒、すまない、怖かったな、大丈夫、ここにいますよ」

「やだあつ！ 捨てないでっ！ 置いて行かないでっ」

母親のことを思い出していたからだろうか。忘れていたはずの記憶が甦ってくる。寒い日。雨だったかもしれない。雨だったような気がする。肌寒い中、戻らぬ人を待つ一人の時間。

「諒!!」

身体が動かなくなる。抱きしめられている。

(誰……?)

「諒、すまない。大丈夫、置いて行かないよ。諒はずっと一緒だ」

「あ……」

(篠崎……)

どうしてこうなったんだっけ、なんで。どうして？

「しの……」

「そう、俺だよ。諒くん……」

暴れていた手足を止めると、篠崎がそっと身体を離れた。視線が交わる。真剣なのに、優しい目。

「諒くん、怖い思いをさせてすまなかった。ずっと一緒にいような」

「ン……」

ああ、もうよく分からない。どうして篠崎を嫌だと思ったんだっか。こんなに大好きなのに。少しでも離れると不安になってしまはずなのに。

「少し疲れてしまったな。ゆっくりねんねしてみようか」

「ねんね……?」

「そう。最近子供に戻っていなかっただろう。今日は一日子供の日だよ。諒くんはたくさん甘えていいんだ」

「いいの?」

なんでだろう。よく分からないけれど「子供の自分」が胸にストンと落ちた。

「ああ。いいんだ。たくさん甘えて、我儘を言って、泣いて、怒って、たくさん笑おうな」

「ん」

「じゃあ、まずはねんねだ。トントンしてみようか」

「ん。トントン……」

ああ、知っている優しいリズム。すぐに眠くなるやつだ。ああもう瞼が重くなってきた。これを与えてくれたのは篠崎だったか。それとも――

「ゆう……くん……」

眠りに落ちる直前、小さな声が聞こえた気がした。

~~~~~

今日は疲れているからずっとベッドだよ、と篠崎は言った。それから色々注文しておいた、とも。

「色々? って何ですか」

まさかベビ―用品じゃないだろうな、と思ったのは一瞬で、まさかそんなはずがないとすぐに思い直す。だってお腹の命についてはこれから二人でゆっくり考えようという結論に至ったのだ。

「ああ、オムツとか」

「オムツ……」

やはり本当は産んでほしい、ということだろう。まだ踏ん切りがなかったわけではないけれど、篠崎が望

むのなら産む。

「ああ、すまない、違うよ。諒くんのオムツだ」

「え？」

(僕のオムツ——?)

「だいぶ疲れやすくなっているから安静にと言われただろう？ それに諒くんが寝ている間にもう少し調べてみたんだが、万が一出血したりするとベッドから降りることも許されなくなるらしい。出血は母体の負担にもなるようだから、少しでも動かない方がいいと思ってな」

(嘘でしょ……)

さすがに心配しすぎだ。身体が重いくらいならトイレくらい行ける。それにベッドから降りられないほどの状態ならきつと自宅ではなく入院での療養になるだろう。そこまでになればさすがにオムツも致し方ないと思えるけれど、自宅でオムツなんて。

「あの、そのオムツって……」

「当然俺が替えるよ」

「嫌です、無理です、何言っているんですか」

「どうして？」

「どうして……」

そんなこと、理由を言わないと分からないのだろうか。事故で、とか、病気で、とかなら分かる。それはもう仕方ないことだ。けれど少なくとも今の安西はそういう状態ではないのだし、動かな過ぎるのも身体に良くないだろう。

「……だって、無理ですよ」

「だからその理由は？」

珍しく頑固だ。普段なら気持ちを察して先回りして優しい言葉をくれるのに。

「だって……そんな、オムツなんて恥ずかしいし……」

「だが身体のためだよ。それに諒くんもオムツの方が楽だろう？」

「普段はベッドで過ごすにしても、トイレくらい動かないと身体が痛くなってしまいそうです」

「身体を動かすのは風呂でいいだろう。当然俺と一緒に入るが」

「やっ、何……」

確かに普段から、時間が合えば一緒に入っているし洗ってもらっている。けれどなんだかこう宣言されてしまうと恥ずかしい。

「今日はまだ届かないから、一緒にトイレに行こうな」

「一人でいきますっ！」

あんなに腹筋を使うのが怖かったはずなのに、気付けば気にせず大声を出していた。そして篠崎が笑っている。

「いつもの諒だな」

「あっ」

わざとだったのか。遠回しの優しさ。だいぶ遠かったけれど。

「あ、だがオムツを購入したのは本当だよ。しばらく子供の日で過ごしてもいいだろう」

「や、子供って……オムツなんて子供どころか赤ちゃんじゃないですか」

「別にいいだろう？」

「良くないですよ」

「どうして」

頭がいいはずなのに、篠崎は時折こうして天然になる。それともこれさえもわざとなのだろうか。

「俺は諒くんを甘やかしたい。身体がっらいときくらい甘やかしたっていいだろう」

「つらくなくても甘やかしてもらってますよ。そもそもオムツなんて甘やかすの内容が違います」

「いいんだよ、俺がしたいんだから」

「僕は嫌ですよ」

「そうか？」

篠崎が口を閉ざした。そして少しの間考えるような素振りを見せる。

「……篠崎？」

「……諒、目を閉じて」

突然何だろう。よく分からないけれど素直に目を閉じる。すると身体に何かが触れた。でもこれは知っている。篠崎の身体だ。抱きしめられている。

「下半身に触れるよ」

「え？ あっ」

手がそつとペニスを撫でる。恥ずかしい。まるでセックスの雰囲気じゃないのに——だからこそ余計に意識してしまう。

「ほら、目を閉じて。想像してごらん」

「ン……」

「諒くんは今オムツをしているよ。大人なのに、子供みたいに紙オムツだ」

「あ……」

急に低くなった声。一気にセクシャルな雰囲気になってしまう。

「そう、諒くんはオムツを意識するとえっちな声が出てしまうな」

「や……」

これではまるで催眠術だ。篠崎に甘やかされることに慣れた身体は勝手に反応してしまう。

「ほら、諒くんは帰宅してからまだ一度もトイレに行っていない。帰って来て、眠って、リンゴジュースを飲んだ。最後にトイレに行ったのはいつだったかな」

「あ……」

記憶を遡る。病院でも行っていない。病院で出したのは精液だけ。ということは、朝家を出る前だ。かなり時間が経っている。それに意識してしまったせいか急速に排泄欲求が芽生えてくる。

「おしっこがしたいな？」

「あ……したい……」

したい。出したい。トイレに行きたい。けれどこのまま篠崎の腕の中でセクシーな声を聞いていたい。

「だが諒くんはここから動きたくない」

「あっ……」

バレている。どうして。口になんて出していないはずなのに。

「でも諒くんは今オムツをしているんだよ。だからこのままここでおしっこができる」

「あ……あ……」

出したい。でも今はオムツじゃない。分かっている。篠崎はそう言っているだけで、本当はオムツじゃない。出したい。足をもじもじと擦り寄せてなんとか必死に尿意に耐える。

「そう、諒くんは今は下着だな。それも方が一の出血に備えて薄い色の下着を穿いている。もし今お漏らしをしたら下着も、真っ白なシーツも黄色くなってしまう」

「やあっ！ やだ、トイレっ、篠崎ッ」

トイレに行きたい。今すぐに。おしっこをしたい。我慢のし過ぎでもうお腹の奥がツンと痛み出している。少しでも動いたら出てしまう、そんな気がする。

「篠崎っ」

(漏れちゃうっ)

オムツだったらこのまま出せたのに、とか、最後のトイレから何時間経っているんだろうとか、そういうば病院でもお茶をもらって飲んでいたな、とか。尿意に関することが次々頭に浮かんでしまう。

「んっ」

「おしっこっ！」

本当にやばい。かなり、相当やばい。漏れる。出ちゃう。少しでも気を緩めたら決壊してしまう。

「ああ、行っておいで」

「っー」

ひどい。こんな風にしたのは篠崎なのに。

「諒、オムツがあったら良かったな？」

もう認めざるを得ない。策略にはまってしまったことは分かっている。もう負けを認めるしかない。

「ん、んっ！ オムツっ、ほしいっ」

だからおしっこを出させてほしい。でも自分じゃいけない。立ち上がったらそれだけで出てしまいそう。

「ああ……でもまだ届いていないからな。どうしようか」

「トイレ……連れてって……!!」

早く。もう今すぐ抱き上げてほしい。

なのに篠崎はゆっくりとした口調のまま動こうとすらしてくれない。安西がもう限界だと知っているはずなのに。

「ん？ 一人で行けるんじゃないか？」

「やだあ……」

お腹の奥は痛いし、少しでも力を抜いたら漏れてしまいそう。こんなに辛い状態だと篠崎が分からないはずがないのに、篠崎は助けてくれない。

「やだあ……怒らないで、ごめんなさい、篠崎……」

「怒っていないよ。可愛くおねだりしてほしいだけだ」

そう言って髪を梳くように頭を撫でられる。その余裕がきつい。安西はギリギリなのに、篠崎だけがゆつくりと構えている。

「うう……」

可愛くおねだり、なんてどうしたらいいのだろう。何てお願いしたらいいのだろう。けれどもう考えている余裕なんてない。とにかく浮かんだ言葉を片っ端から口にしていく。

「トイレ連れてって」

「それはさっきも聞いたな。でも諒くんは一人で行けると言っていたよ」

「や……トイレ、行けないから……篠崎、抱っこでトイレ……連れて行って……」

「トイレでどうしたいのかな」

「おしっこ！ おしっこしたいっ！ もう漏れちゃう……」

もう本当にギリギリだった。限界。

(出ちゃう——！)

「諒くん」

「しのっ……!!」

突然塞がれた口。無防備な唇を割って入ってくる篠崎の舌。弱いところを知り尽くした舌は、気持ち悪いところを的確に突いてきた。

「んっ！ んんんっ！ んんんー!!!!」

上あごを舐められ舌を強く吸われた。痛いくらいに吸われると、一気に身体から力が抜けてしまう。

「んんんっ！」

じわ、と下着が濡れていく。腕は強い力で掴まれ振りほどけない。

~~~~~

普段は篠崎に言われて退屈だと言いながらベッドに入る諒が、自ら寝ると言った。そのことに一抹の不安を覚えながら急いで食事を掻き込んでいく。

(……ほとんど食べてないな)

パンは篠崎だけ。諒には残すことへの罪悪感がないようにと思いきさな皿でスープだけを出した。それでもほとんど減っていない。

(やはり食欲がないのか……)

それでもまだ、テーブルに着いただけいいのだろうか。とりあえず数口はスープを飲んでいたようだから、一口も食べないよりはいいと思うしかないのかもしれない。

(それに声にも覇気がなかったな)

精神的にも不安定になるということはドクターから聞いている。身体のケアと心のケアがどちらも重要で、今失敗すると将来の不仲に繋がりがかねないとも。

(……急いとう)

食器を洗おうかと思っていたけれど、それも後でいい。とりあえず諒が寝てからでも。いやでも隣にいないときに目を覚ますと寂しがるかもしれない。それならやはり諒がソファに座っているときに――。

「諒」

もしかしたら眠っているかもしれない。ずっと篠崎が寝かしつけないと眠れない日々を送っていたが、少しづつ諒は一人でも眠れるようになってきていた。

それが嬉しくもあり、寂しくもあった。

静かにドアを開けると、ゆっくり開いたその隙間から苦しそうな音が聞こえた。

「諒!」

思い切りドアを押し開け駆け寄ると、ベッドには小さな赤いシミが見えた。諒の顔の付近が赤く染まっている。

「諒!」

肩を抱き、諒の表情を見る。幼く可愛い顔は苦痛に歪んでいた。

「諒……!! 待ってる、今救急車を」

「あ……」

「諒?!」

~~~~~

「いえ……あの、トイレ……」

「ああ。……諒、オムツがあるよ」

言いながら一度映画を止める。

「え……」

「動くのはつらいだろう」

「でも……」

きつとつらくなければ「大丈夫です」と言い切っただろう。それができないのはやはり動かさたくないということだ。そもそも自分で動けるなら最初から「トイレに行ってください」と言っただろう。

「せつかく買ったんだ。無駄になってしまっし、悪阻が治まるまではいいだろう」

「や、でも……」

「恥ずかしくないよ。今諒くんは俺たちの子供のために頑張ってくれているだろう。少しでも身体を大事にしてほしいし、そのために対策するだけなんだから恥ずかしいことは何もないよ」

やましい気持ちがないわけではない。ないと思いつれないところが自分でもどうかと思うけれど、とりあえず今はどうこうするつもりはないのだからいいだろう。

「でも……」

「ほら、せつかく排泄ができるんだ」

排泄欲求があるということはそれだけ水分を摂れているということ。そう思うだけで安堵する。

「布団を捲るよ。寒いかもしれないが少しだけ耐えてくれ」

きつと諒の性格を考えれば自分からオムツを選ぶことはできないだろう。こういうときは少し強引にしてやった方がいい。

やはり諒は布団を捲っても何も言わなかった。きつと自分でもオムツの方が楽だと分かっているのだろう。

「いいこだ」

身体が動かぬようそつとズボンと下着を脱がせ、テープタイプのオムツをあてる。ギャザーもしっかり確認をして、オムツ漏れないように。

(してもいいんだけどな……)

オムツ漏れも可愛いものだ。けれどベッドを片付ける間横にならせてやれないと思うと可哀想。

「よし、できたよ。さあおしっこをしてごらん」

全く食べていない。便は出ないだろう。もし便だったら意地でもトイレと言いつ張ったはず。

「や、篠崎、だっこ」

「ああ」

さすがにオムツを見られながらの排泄はできないか。おしっこラインと言われるラインが浮き出てくる様子も見なかったけれど仕方がない。少しずつ慣れさせてしまえばいいのだ。焦る必要はない。

「ほら、抱っこだよ」

捲った布団を戻し、体重が掛からないように気を付けながら覆い被さる。

「出してごらん。我慢はよくない」

「ん……」

しばらく頭を撫でていると「はぁ……」と熱い息が漏れた。

「諒」

「っ、や……」

出ているのだろう。それに気付かれたのが恥ずかしいのか。

「いいこ……可愛いよ」

「やっ……」

「大丈夫。出たかな」

「ん……でも……」

「うん？」

「自分で」

「ダメだよ。まだ動けないだろう」

自分でオムツを替えられるほど元気ならそもそもトイレに行けている。頭をもう一度撫で、額にキスをしてからもう一度布団を捲った。

(そそるな……)

まさか濡れたオムツ姿にこれほど劣情を掻き立てられるとは思っていなかった。それに今は諒がづらい思いをしているのだ。看病のようなもの。それなのにしばらく抱いていないせいかひどく興奮してしまった。

「……外すよ」

しかし今その興奮がバレれば大事になりかねない。諒も侮辱されたと思うかもしれない。いや、怒りよりも幻滅されそうだ。自分はこんなにもつらいのに、と。

「や、篠崎……」

「大丈夫だよ」

これなら映画を再生しておいた方が良かったか。しかしもうテープを外してしまった。

「……少ないな」

色が変わった場所が少ない。それに色が濃い。水分が足りていないのは明白だった。

「やっー!」

「健康状態の確認だよ。諒がトイレに行ったとしても、俺もついていくつもりだった」

「やだぁ……」

「水分が足りていないな。もう少し舐められそうなら水を舐めようか」

約5万1千文字です。

悪阻（嘔吐）、発熱の体調不良、篠崎の策略によるお漏らし、オムツ等。  
宜しくお願い致します。